

書の付論とでもいうべき第六章で詳述されている)で発表されても十分な内容をそなえているばかりか、日本のデュルケーム研究の水準を証明するものである。

そこで本書は単にデュルケーム研究、フランス大学史研究としての価値をもつだけでなく、数多くの社会学的命題をちりばめている。豊富な資料に裏付けられた歴史的叙述に読者を圧倒せしめないためにも、こうした一般命題を整理してもらえれば、もっとよみやすく説得力をもつものとなっていたであろう。学問や理論の成立や変貌、大学の役割や改革過程その他、本書に盛られた事実は、単にデュルケーム、社会学、フランスなど個別的、特殊な事象を越えて、広く一般的

に妥当する法則的命題を示唆することが多い。例えばここで明らかにされている新興の学問の制度化、大学における講座の設立、さらには大学の改革にさいしての既存の勢力の側からの抵抗、それを打開するための戦略などは、決して第三共和政前後のフランスに限られたものではなく日本にも見られるし、またそれに似たプロセスやメカニズムは大学だけではなく学校制度全般にも見られるように思う。また大学の公開が叫ばれる現在、「固有の学生」を大学がもつことがいかに大事かなどという一般的教訓も、本書から(つまりフランスから)数多く引き出すことができよう。

◆B 6判 318頁, 2500円, 木鐸社

■ 書 評 ■

山村賢明著『かわいくない子どもたち—発達疎外の時代—』*

深谷昌志著『孤立化する子どもたち』**

九州大学 住 田 正 樹

1

ここで取り上げる『かわいくない子どもたち—発達疎外の時代—』と『孤立化する子どもたち』は、それぞれ山村、深谷教授が一般読者を対象に、今日の子どもたちのおかれている問題状況の把握を目的に執筆されたものである。構成は以下のようになっている。

『かわいくない子どもたち』

第1章 子ども観の転換

第2章 子どもと学校

第3章 病める子ども

第4章 荒れる子ども

第5章 受験体制からの脱出

附 章 現代の子育て

『孤立化する子どもたち』

1 遊びのスタイルが変質した

2 テレビはどう見られているか

3 大衆化社会と子どもの孤立化

4 生きる力の衰退をめぐって

5 成績崇拜と意欲の減退

6 日本の学校教育に欠けているもの

7 第二次反抗期の喪失と父親のあり方

この構成からも大凡の内容は理解されようが、いま内容をごく簡約に述べるとこうである。『かわいくない子どもたち』は、今日の子どもたち、殊に中学生は、受験体制の抑圧をうけ、鬱屈した精神状態におかれているとする。高度工業化社会における知的能力中心主義と日本の文化的風土(集団主義的な同調と競争の文化)の相乗作用によって今日の受験体制は確立したが、それが今や家庭と学校を支配し、ために子どもたちは成績という一元的尺度でのみ評価され、勉強以外の活動は許されていない。だから子どもたちは出口のない閉塞感と鬱屈した欲求不満に陥り、疎外された発達を強いられている。そしてその欲求不満の故に、一方

では、いじめ、登校拒否、自殺、性のゆがみといった病める行動が発生し、他方では、非行、家庭内暴力、校内暴力、つっぱりといった荒れる行動が発生している。だから受験体制の抑圧から子どもたちを解放することが必要であり、そのためには親は子ども観を転換させ、子どもを人格をもった小型の大人、つまりかわいくない子どもとして扱い、子どもの自由を認めてやらねばならない。そして従来の固定的な人生観を再検討しなければならないというのである。

『孤立化する子どもたち』は、今日の子どもたちは、体や知識面での成長が加速されている反面、精神的発達が遅滞しているというアンバランスな成長を辿っているとし、それを児童期・青年期の発達課題の喪失の故であるとする。児童期の発達課題とは遊戯仲間への帰属であり、青年期のそれは第二次反抗期なのであるが、今日の子どもたちはテレビ・マンガ等の孤独型の遊戯に傾斜して、遊戯仲間であるギャング集団を喪失しているため、人間性を琢磨する機会が失われてしまった。そしてその一方で、学業に追われた生活をしているが、それが中学生になると高校進学を、高校生になると大学進学を目指しての学業中心の生活になり、そうしている間に、そしてまた他方で父親の権威が喪失して子どもは感情的反発の対象を失ってしまったがために、第二次反抗期を経験する機会を失い、自己の世界を確立することなく、幼児的心情を残したまま体や知識面だけ成長するという体と心のアンバランスを生じさせているのであるとする。

両著書には、内容的に関連する部分もあり、またそうした観点からの書評が評者に与えられた課題かも知れないけれども、ここではそうしたことに捕らわれずに、2・3の気づいた点を指摘したいと思う。

2

今日の受験体制下での子どもの学習に

は、2つの目的がある。受験のための知識・技術の習得と5段階相対評価による成績向上である。今日の子どもが受験体制の枠に規制され、その受験(高校入試)の合否基準がペーパーテストと内申書の2つにあるとすれば当然であろう。そしてペーパーテストの点数に関わって、いわゆる偏差値信仰ともいえるべき傾向が現れた。

山村教授は、偏差値信仰が受験体制を支配し、それが将来の夢を閉ざして子どもを欲求不満の状態にしていると述べているが、そしてそれは一面確かにその通りであろうと思うけれども、受験体制を問題とするからには、内申書制度をも取り上げるべきではなかろうか。否、むしろ今日のように受験勉強を長期化・日常化せしめたのは内申書制度ではないかと思われる。中学生になった時点からの常時の成績や学習態度の評価が合否を何程か左右するとすれば、受験は常に射程距離にあって、子どもは不断の心的緊張を強いられることになり、そこに欲求不満や閉塞感が徐々に蓄積されていくと思われる。「偏差値が不幸な予測を与える」(152頁)のは事実としても、「子どもは偏差値も努力の程度によって上下すると考えている」(深谷, 169頁)なら、少なくとも受験までは努力の余地があるが、内申書に記されるであろう過去の評価は如何ともしがたい。それも中学生の初期の時点ですでに挽回不可能な不幸な予測をもつ。まして自己を選別的に評価した、その教師との常時の接触を余儀なくされる学校生活では、子どもは正に「やり場のない圧迫感と閉塞感からエネルギーを爆発させる」(校内暴力, 103頁)か、そうした場からの逃避と絶望(登校拒否・家庭内暴力)あるいは校則の否定(非行)へと向かうのではなかろうか。そしてその僅少な努力の余地に望みをかけて、子どもは塾学習に奔走するのではあるまいか。だから、内申書制度をこそ受験体制の問題として取り上げるべきではないか

と思うのである。

次に、受験体制による欲求不満から生じる問題行動を病める行動と荒れる行動とに分類しているが、その分類の基準は何かという疑問である。適切な分類カテゴリーだと思うけれども、そうだとするなら家庭内暴力といじめは、それぞれ逆のカテゴリーに入るのではなかろうか。欲求不満に対する反応は、外罰的反応（攻撃）と内罰的反応（退行）とに分類されるが、それを基準にするにしても、また問題行動の発生過程や形態・内容を基準に分類するにしてもである。家庭内暴力は表面的には暴力行為であるが、その発生過程は登校拒否と軌を一にし、欲求不満の反応からすれば、いわば自己の分身（家族、殊に母親）に対する暴力という内罰的な一種の自虐的行為であり、またいじめは陰湿な行為ではあっても、本質的には欲求不満の解消をはかる一時的な共犯による連帯的な攻撃的行為ではないかと思うからである。もっともこれは枝葉の問題であろう。

さて、本書の結論は、受験体制の圧力から子どもを解放するために、親はこれまで当然とされてきた生き方・考え方の再検討が必要であるということにある。しかしそれだけではいま一步説得力に欠けるのではないと思われる。すでに父親の多くは「子どもに夢を託さず、人並みの暮らしを願っている」（深谷、248～250頁）のであり、その人並みの生活にさえ知的能力が要求されているからこそ親も子も受験に邁進するのである。知的能力は職業や生活の営為と直結するが、他の人間的資質は不可欠ではあってもそれだけでは職業や生活の営為とは関連しない。リカレント教育とか生涯教育は生活の保障があつてのことである。だから一人の親として読んだ場合、最も知りたいのは、こうした従来の考え方、そして現状以外に、それではどのような生き方・考え方があるのかという再検討の具体性である。「高度な工業化社会であれば

あるほど、知的能力以外の人間的資質が必要とされるはず」（176頁）ならば、そうした人間的資質は具体的に社会のどのような領域で、どのように要求され、そしてそれは生活の営為とどのように関わっているのか。「子どもの自由を認め、その可能な限りの実現をはかること」（155頁）が将来の生活の営為とどのような形で結びつくのだろうか。こうした問題こそが親としては知りたいのではあるまいか。それが分からないがために、ともかくも人並みの学歴を求めて受験に同調するのではないかと思うのである。

3

『孤立化する子どもたち』には、深谷教授がこれまで実施された多数の調査からの豊富なデータが用いられている。そして詳細に分析された今日の子どもの傾向は確かにその通りだと思う。ただ、調査データが質問紙法のそれに限られているようであるだけに、対象が子どもであることを考えれば、果たして今日の子どもの実態をどれだけ正確に把握し、また解釈されているだろうかという疑問が常に付きまとった。と同時に、データが豊富なだけにその説明にウェイトがおかれ、分析がやや平板な印象を与えるようになったのではないと思われる。ここでは調査についての疑問を述べてみたい。

子どもは急激な成長・発達過程にあるから、僅少な年齢差であっても具体的な知識・能力には大きな差が現れる。だからその成長・発達段階に即した質問項目が考えられねばならない。と同時に、子ども調査の場合には、調査者である大人と被調査者である子どもとの判断基準が全く異なっていることに留意しなければならない。本書での疑問は、例えば仲間との遊びが喪失したとする遊びの調査項目にある。小学校高学年児童が果たして鬼ごっこや隠れん坊のような単純な遊びをするのだろうか。「子どもが成長するにつれ、活動量が多く、技術の難しい遊び